



公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104-0045 東京都中央区築地5-3-3 築地浜離宮ビル7階
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

主な内容

- 3面 2026年度がん征圧スローガン決定
- 4～6面 2024年度ホットライン年報
- 7面 がん教育授業 命の大切さ伝える

2025年度 ウェブアンケート調査 日本対がん協会

HPVワクチンの定期接種 全年齢で接種率が増加

子宮頸がんの原因となるヒトパピローマウイルス(HPV)の感染を防ぐワクチンの定期接種の接種状況などを探るため、日本対がん協会は定期接種の対象年齢となる小学6年生～高校1年生の女性と保護者を対象に「HPVワクチン調査」(ウェブアンケート調査)を実施。併せて同年代の男性接種についての認知状況なども調べ、報告書にまとめた。

調査の背景

日本では2010年11月に子宮頸がん等ワクチン接種緊急事業が始まり、2013年4月にHPVワクチンの定期接種が導入された。だが、厚労省審議会がワクチン接種との因果関係を否定できない持続的な疼痛の頻度がより明らかになり、国民に適切な情報提供ができるようになるまでは対象者への個別通知など積極的勧奨をすべきではないとされた。同年6月から積極的勧奨が差し控えられたが、審議会などで議論が進み、2022年4月に積極的勧奨が再開された。調査は定期接種

年代の接種状況や意識の違いを探り、ワクチン施策へ反映させることを目的に、前回2024年度調査と同時期の2025年10月に実施した。

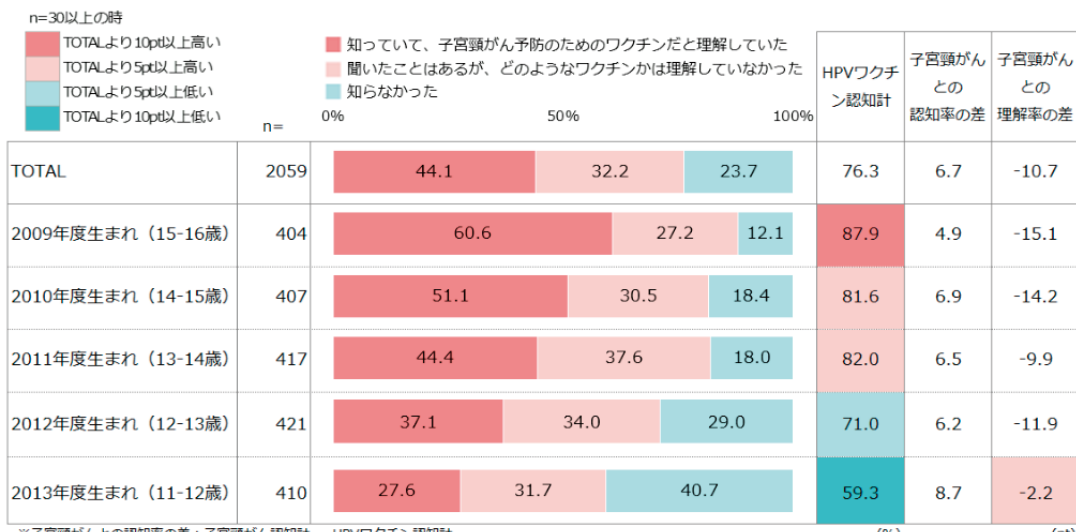
WHOによると、世界的に男性への定期接種導入が進んでいる。日本でも女性の定期接種対象と同じ年代の男性

に対して独自に費用助成する市区町村がある。今回の調査では、男性接種の認知の状況を探り、議論の土台となるデータの提供も目的とした。

HPVワクチンの定期接種対象の接種実態

調査対象は定期接種年代の小学6年

■女性調査 《HPVワクチン認知度》



■女性調査 《2024年度調査と2025年度調査の比較》

	n=30以上の時		3回		2回		1回		接種したことはない		わからない・答えたくない		接種経験あり計	
	n=		2024年		2024年		2024年		2024年		2024年		2024年	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
2009年度生まれ (15-16歳)	354	355	14.4	17.7	18.6	39.2	16.7	9.3	48.0	29.9	2.3	3.9	49.7	66.2
2010年度生まれ (14-15歳)	310	332	5.8	7.5	15.2	32.2	13.5	12.3	61.0	44.3	4.5	3.6	34.5	52.1
2011年度生まれ (13-14歳)	295	342	1.7	3.5	7.8	24.6	20.7	14.6	67.8	55.0	2.0	2.3	30.2	42.7
2012年度生まれ (12-13歳)	210	299	1.4	1.3	1.9	15.1	12.4	21.4	80.5	57.9	3.8	4.3	15.7	37.8
2013年度生まれ (11-12歳)	-	243	-	2.1	-	4.5	-	9.9	-	78.2	-	5.3	-	16.5

生～高校1年生相当(2009年4月2日～2014年4月1日生まれ)の女性で、母親に代理回答をしてもらい、回答数5788サンプルを得た。

接種経験率は、年代が高くなるほど高い結果となった。前回の2024年度調査と比べ、全年代で12～22ポイント程度上昇し、子宮頸がん・HPVワクチンの認知率も上がった。

接種率は前回調査の同年齢の接種率よりも高い水準で、対象者に向けた認知拡大施策や情報提供、公費助成施策などが接種行動に結びついている可能性を示した。ただ、2012年度生まれから下の年代は相対的に上の年代よりも接種率が低く、この年代へのアプローチが課題として浮かび上がった。

接種のきっかけは、全体で「国や自治体からHPVワクチンに関する情報を提供されたから」が最も高く38.8%。「情報提供」「周囲の影響」も多く挙げられた。一方、非接種の理由は、全体で「ワクチンの副反応が不安だから」が最も高い52.6%。前回より低い傾向だが、未接種の半数以上は「ワクチンの副反応」に不安を感じていた。

HPVワクチンのイメージは全体で「予防効果がある／ありそう」が21.1%と最も高い。前はネガティブ意見の「副反応が多い／多そう」が最も高かったが、今回はポジティブな意見がトップになった。

いずれの年代でもHPVワクチンの認知率は子宮頸がんの認知率より低いものの、「名前だけでなく内容も理解している層」は全年代で子宮頸がんより高い。定期接種対象に入りたての年代や今後対象に入る年代の認知率拡大が肝要だ。

まとめとして、定期接種の状況は改善しているとみられる。広範な疼痛や運動障害などの多様な症状が生じた場合の相談支援や適切な医療の提供体制も整えられてきた。

HPVワクチンに詳しい和歌山県立医科大学の上田豊教授(先進予防・健康医学)は「我々の解析とも合致する傾向で信頼できる。背景を含めた今回のような各年代の多数の人を対象にした調査は例がなく貴重だ。定期接種対象で

は接種率は増加傾向があるが、7割程度だった定期接種前の公費助成の時期の水準には達していない。小中学校や教育委員会などとのさらなる連携強化も必要だろう」と指摘している。

HPVワクチン 男性接種に関する調査報告

調査では、女性の定期接種年代に相当する小学6年生～高校1年生の長子(長男・長女)がいる父母に回答をもらい、回答数1670サンプルを得た。

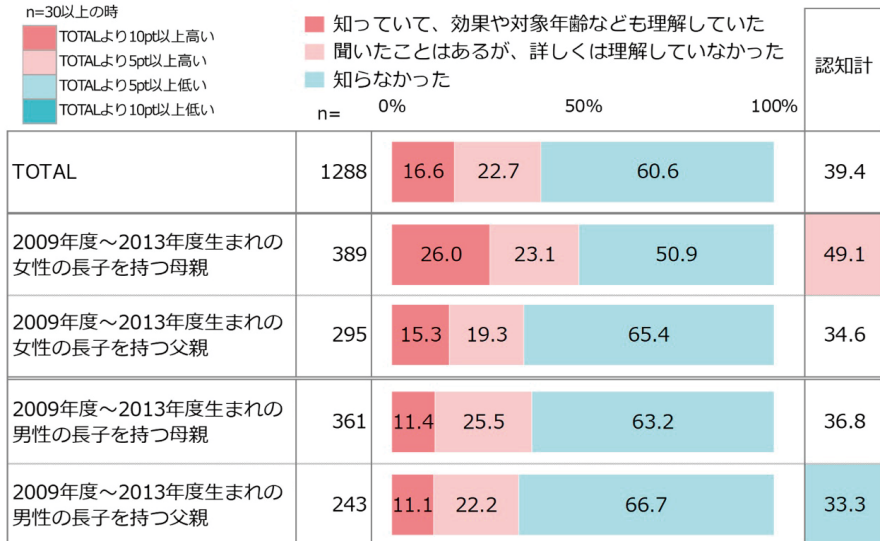
HPVワクチンの認知率は全体で77.1%。長男・長女いずれの場合も、父親より母親の方が認知率は高く、20ポイント以上のスコア差があった。HPVワクチンは「子宮頸がん予防」の文脈で訴求されることが多く、女性関連の情報として認識され、母親の方が情報接触機会は多いためと考えられる。また、長男の親より、長女の親の方が認知率は高く、10ポイント以上のスコア差になった。HPVワクチンが女性の健康問題(子宮頸がん予防)として認識されていることも背景にある可能性がある。

HPVワクチン認知者のうち「男性でもHPVワクチンを接種できること」の認知率は39.4%で4割程度だった。認知率は長女の母親のスコアが高く、HPVワクチンに関する情報収集の中で認知したと推察される。

接種状況については、長男の接種経験は全体で3.1%。接種理由は

- ◆HPVワクチンに関する調査報告(2025年度) (<https://www.jcancer.jp/release/18403/>)
- ◆HPVワクチン男性接種に関する調査報告(2025年度) (<https://www.jcancer.jp/release/18405/>)

■男性調査 《男性接種の認知度》



(%)

2026年度がん征圧スローガン決定 千葉県支部・児山さんの作品

がん検診 定期受診は 自己投資

日本対がん協会の2026年度がん征圧スローガンが「がん検診 定期受診は 自己投資」に決まった。千葉県支部・児山さやかさんの作品。この4月から1年間、日本対がん協会のポスター、リーフレットなどに掲載してがん検診受診を呼びかける。また、希望する自治体や企業などの啓発資材にも用いられる。

スローガンは毎年、全国のグループ支部から候補作品を募り、日本対がん協会の選考委員会が決めている。2026年度のスローガン候補には40支

部から182作品が寄せられた。

がんは早期に発見できれば治る可能性が高い病気だが、多くの場合、早期では自覚症状がない。そのため科学的根拠に基づくがん検診を一定の間隔で受け続けることが大切だ。

児山さんは、健診(検診)の便潜血検査をきっかけに大腸がんが見つかった家族が治療に向き合う姿を通して、本人や周囲の人たちの心身の負担や社会的な負担の大きさを痛感したという。投資ブームが広がる中、定期的な健診(検診)受診こそが未来の自分に最も

確実なリターンをもたらす自己投資だと感じ、このスローガンを考えた。がん征圧月間の9月、秋田市で開催する「がん征圧全国大会 秋田大会」で表彰式が行われる。

次点となる優秀賞には、田中亨さん(青森)、木村高幸さん(栃木)、竹田まなみさん(埼玉)の各作品が選ばれた。(順不同)

スローガン使用に関する問い合わせは、日本対がん協会の広報担当(電話03-3541-4771<代表>、メール:jcskouhou@jcancer.jp)へ。

最優秀賞

がん検診 定期受診は 自己投資



公益財団法人 ちば県民保健予防財団 診療看護課

児山さやかさん

「今は忙しいから」と検診を後回しにしていますか。定期検診は未来まで続く健康な体を維持するための、最も価値ある自己投資です。早期発見はあなた自身だけでなく、周囲の大切な方々の日常を守ることに繋がります。数年後の自分が健やかに笑っているよう、今という時間を自分の体へ投資してください。

優秀賞

AIに 聞くより先に がん検診

公益財団法人 青森県総合健診センター 健診管理課

田中亨さん

私は会話型AIに何でも相談してしまうタイプで、健康ごとに関する心配事もまずはAIに聞いてしまいます。そんな自分自身を振り返って作りました。幸い、私は健診に従事していますが、AIへの相談だけで安心し、検診受診を控えてしまう方がいるかもしれません。そんな方々へのメッセージになればうれしいです。

優秀賞

症状が 出てない今こそ がん検診

公益財団法人 栃木県保健衛生事業団 健康情報課

木村高幸さん

当然ながら症状がない時にがん検診を受けることがとても重要で、それを広く周知したいと考えました。「ちょっと調子が悪いから検診を受けに来た」という人がいますが、そのような場合には医療機関を受診して下さい。そして、がん検診は科学的根拠が確立した検査法で利益・不利益をよく理解し、適切な年齢・間隔で受けていただきたいと思います。

優秀賞

健康を 未来へつなごう がん検診

公益財団法人 埼玉県健康づくり事業団 総務課

竹田まなみさん

がん検診は今の状態を知るだけでなく、受診したあとの安心や治療によって未来を変えることもできるということを伝えたいと思い、このスローガンにしました。今受けるがん検診は、10年後、20年後、さらにその先の未来の健康のためにもなります。定期的に受診して健康な未来へつなげて欲しいです。

相談件数1万210件 前年度並み

がん相談ホットライン
2024年度年報から

がん患者や家族などから無料で相談を受ける「がん相談ホットライン」の2024年度の年報がまとまった。相談件数は1万210件となり、前年度に続いて1万件を超えた。

2024年度のまとめ

ホットラインは予約不要で、相談者・相談員ともに匿名で実施し、看護師や社会福祉士が相談に応じる。2024年度の相談件数は月平均約850件で前年度比99.9%だった。月別の相談件数は5月が988件で最も多く、9月909件、10月908件と続いた。

相談者の男女比は女性が80.8% (8251件)、男性が19.1% (1953件)で、例年と同じく女性からの相談が多かった。年代別では、50代が38.0% (3876件)と最も多く、60代20.0% (2044件)▽40代12.1% (1236件)▽70代10.1% (1033件)などとなった。

続柄をみると、患者本人が74.5% (7610件)と最も多く、次に娘8.6% (881件)▽妻4.6% (467件)となっており、この傾向は例年と変わらなかった。

相談を受けた疾患部位は、乳房34.3% (3499件)▽腎・尿管・膀胱11.7% (1191件)▽大腸10.7% (1092件)▽肺8.2% (834件)など。乳房は前年度から6ポイント(606件)増加した。腎・尿管・膀胱が多いのは、頻繁に利用した相談者がいたため。

相談は国内外から寄せられた。相談者に了承を得て居住地域(都道府県別)を聞き、集計したところ、前年度同様、人口とがん診療連携拠点病院が多い地域が上位となり、特に首都圏が多かった。海外からの相談は、主に海外在住の日本人からの相談だった。

相談内容については、一度の相談に複数の問題が絡む場合が多く、相談員は複数の項目を選択している。その中で最も比重の高い項目を集計すると、「症状・副作用・後遺症」が26.9% (2744件)と最も多く、次いで「がんの治療」が18.6% (1896件)、「不安・精神的苦痛」に関する相談が15.6% (1597件)など。「グリーフケア」は2.8% (287件)だった。

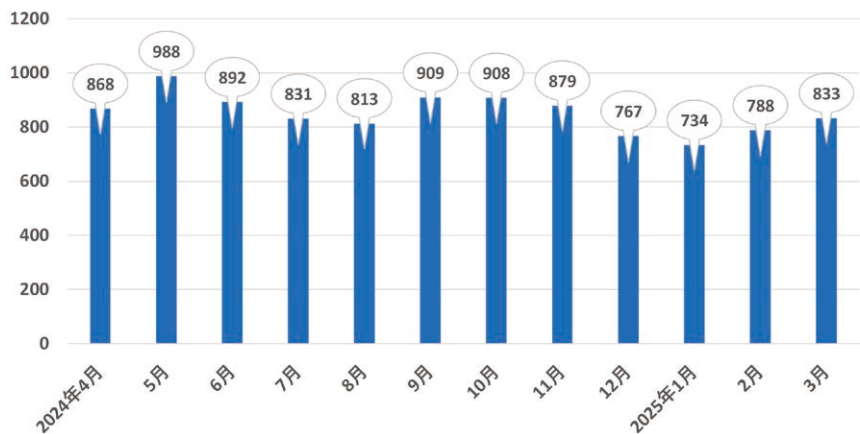
患者と家族(配偶者、親、子、兄弟姉妹)では相談内容に違いがあり、患

者からの相談は「症状・副作用・後遺症」が最も多く、家族からの相談は「がんの治療」が多かった。

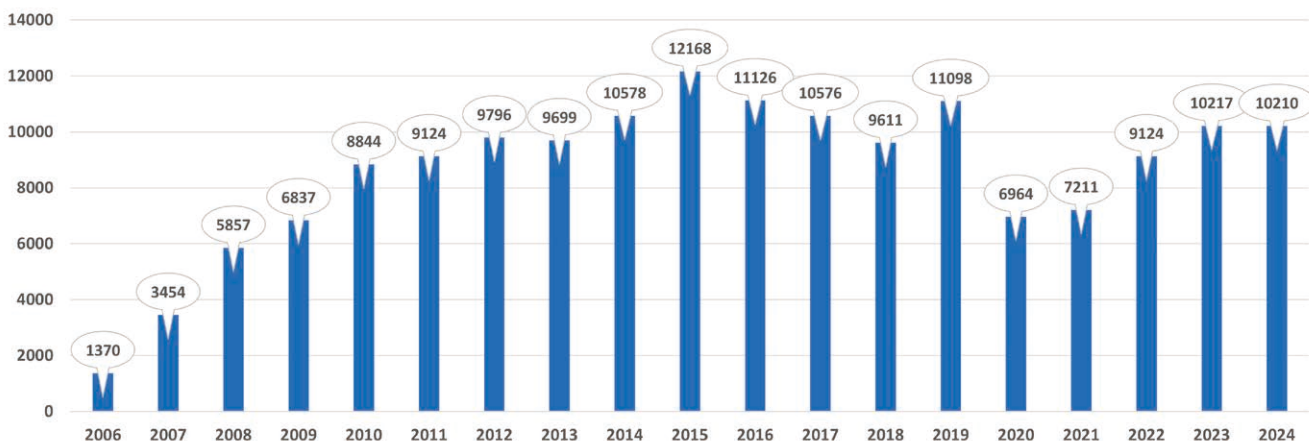
一方、相談内容の全項目の集計では、「不安・精神的苦痛」が最も多く7659件、次いで「症状・副作用・後遺症」4824件、「がんの治療」3393件などとなった。

ホットラインの利用回数は、初めての利用者が25.5% (2607件)、自己申告ながら二度目以上が71.3% (7275件)、不明3.2% (328件)だった。初めての利用者がホットラインを知ったきっかけは、インターネット (1724件)が最も多く、次いでリーフレット (328件)が多かった。また、病院や他の相談機関からの紹介、友人・知人、家族の口コミもあった。また、書籍や雑誌等で知った利用者もいた。

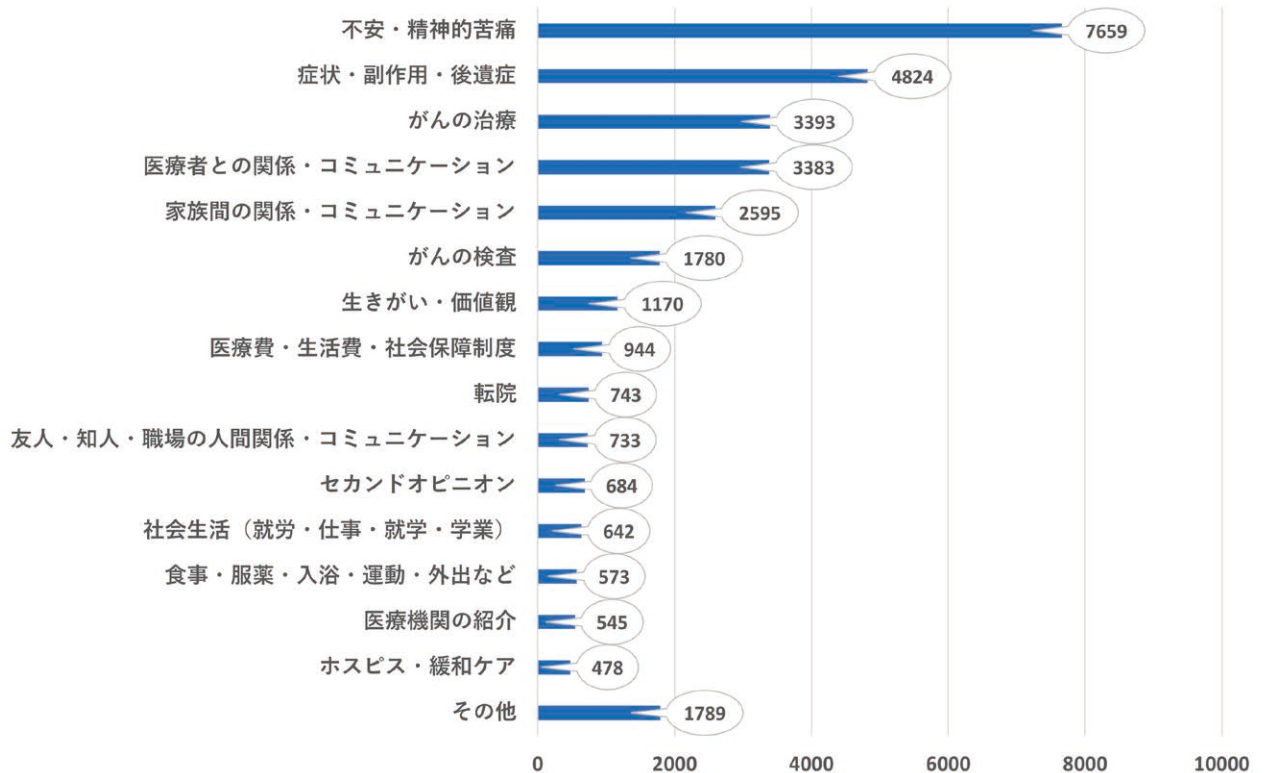
月別相談件数



年度別相談件数



相談内容の総件数



相談実績から見てきたもの

主たる相談を集計した「相談の内容」は「症状・副作用・後遺症」が最も多かったが、相談内容の全項目を集計した「相談内容総件数」は「不安・精神的苦痛」が最も多く、どの相談も根底に不安があるといえる。

患者と家族の相談内容の上位10位を比べると、患者は「症状・副作用・後遺症」、家族は「がんの治療」が最も多い。患者は何かの症状が出て困ったり不安になったりして相談することが多いのに対し、家族はできるだけ長く生きてほしいという思いで治療に関する情報を求める相談が多い。順位は違うが、上位10位中、6項目が共通している。

その一方で、患者は「生きがい・価値観」の項目が入り、がんになって改めて自分の生き方などを考える過程での相談が多い。これに対し、家族は「ホスピス・緩和ケア」が入り、先を見据えて緩和ケアを知っておきたいとの相談が多かった。

グリーフケアの相談も寄せられたが、診断・治療中からの利用者が引き続き相談にくるケースや、患者の他界

後、医療機関とのつながりがなくなり、話せる場所がない、とかけてくるケースがある。遺族には継続的なサポートが必要だと感じる。

二度目以上の利用者では、治療の選択時に毎日のように集中的にかけてくる人、長く治療や経過をみていく中で受診の前後や検査前に気持ちが落ち着かないとかけてくる人が多い。また、不安が強く、「一人になると怖い」と人とのつながりを求めてかけてくる人や「話を聞いてほしい」とかけてくる人も多かった。

相談員が気になった相談

認知機能の変化に伴う悩み

がんの治療に伴って記憶・思考・集中力などの認知機能が変化することがある。薬物療法に伴う「ケモブレイン」では、物忘れが増える、集中力・判断力の低下、考えがまとまらない、何をすることも時間がかかる、同時に複数のことができないといった症状がある。ただし、こうした症状が必ずしも出るわけではない。

症状が出る場合も出方や程度、期間はさまざま。相談の中には、以前と変わらず働いている人がいる一方

で、思うように働けないという相談もある。「以前のように効率的に仕事がこなせない」「集中力に欠け、ミスが増えた」との内容で、「周囲に迷惑がかかるので申し訳ない」「以前の自分と仕事能力が違うので落ち込むし、悔しい」「見た目ではわからないため、周囲の理解が得られず、非難されることもある」などの戸惑いや悩みを抱えている。

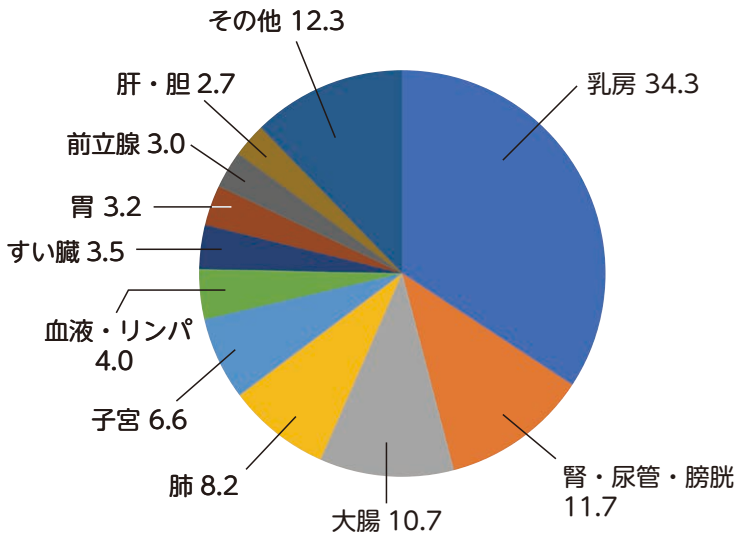
ホットラインの相談員は、相談者の悩みに寄り添い、治療後に起こり得る症状を説明し、心の負担が軽くなるよう努めている。悩みに応じた相談先の提案、周囲のサポートが得られるような助言、相談者がいまできそうなことを一緒に考えている。

今後、このような症状があることを多くの人に知ってもらえれば、周囲にも打ち明けやすくなるように思う。さらに、働き方の工夫につながり、少しの思いやりで働きやすい環境になっていくのではないかな。

コミュニケーションの難しさを抱えた人

がん治療において医療者とのコミュニケーションは信頼関係の構築などでとても重要になる。しかし、コミュニケーションを上手く取れず、治療が中

相談の疾患部位



断したり病院でトラブルになったりして困っているとの相談や、医療者への不信を訴える相談がある。

がん治療は通院治療が増えており、入院治療と比べて医療者との接点は少ない。患者が外来の限られた時間の中で説明を聞き、質問をして理解するのは容易ではない。コミュニケーション

が得意な人でも、がん診断によって心が衝撃を受けたり弱っていたりする時は冷静に考えることが難しく、普段通りにはいかない。

相手の気持ちや会話の流れを理解することが難しい、話が長くなる、話の内容が飛ぶ、同じ質問を繰り返すといった患者個人の特性がコミュニケーシ

ョンの支障になる場合もある。患者側が打ち明けられない限り外見からは分ならず、医療者側は「話がかみ合わない」「話を通じない」などのマイナスの印象を抱く場合もある。

実際、「質問をしたら『何度も説明したでしょ』と怒られた」「『もっと話を短くしてください』と言われて話ができない」「『あなたばかりに時間をかけられません』と言われた」などの相談を受け、「病院を替わりたい」「こういう医師のもとでは治療ができない」などの声から、コミュニケーションの信頼関係への影響が伺える。医療者には難しい実情があるように思うが、まず、そうした特性がある人たちのことを知ることが大事だ。

コミュニケーションの難しさを抱えた人に対し、ホットラインでは、特性を踏まえたうえで、医療者とのコミュニケーションが上手くいくよう、医療者との話し方やどう行動するかなどを具体的に提案するように心がけている。

相談者からの感謝の言葉



診断前 前がん病変の経過観察で自分が悩んでいることを理解してくれて、共感してもらえて良かった。

治療前 ホットラインを利用することで、医療者に言いたい気持ちを口にだして話す訓練ができていると感じる。そしてまとめて考えることができる思考にもなれたと感じる。

治療中 助けてくれる人がこの電話の向こうにいるんだな、と思いながら電話をしています。いつもありがとうございます。

治療後 残された時間が少ない中でも心が穏やかになりました。痛みも和らぎました。不思議ですね。少し気分転換してきます。

家族から 退院後の生活への不安があったが、院内の相談室は混んでいて相談できなかった。土日は病院の相談窓口はやっていないためどうしたらいいかと思っていましたが、相談できる場所があって本当に助かりました。

友人知人から とても安心しました。AYA世代の話聞いてとても安心しました。友人もサポートされていると良いと思う。

遺族から 親のがん闘病を支えてきたが、とうとう亡くなった。病気になってからずっと、この電話で救われた。ありがとうございました。

がん相談ホットライン 03-3541-7830

毎日受け付けています

【受付時間】 10:00~13:00 15:00~18:00

社会保険労務士による「がんと就労」電話相談の予約はインターネットの専用フォームで受け付けます。がん専門医による相談は今年度休止します



社労士による電話相談

電話がつながりにくいことがあります。何卒ご了承ください

東京都立高2校のがん教育授業

がん体験談を通して 健康、命の大切さを考える

日本対がん協会

東京都立高校2校で3月、がん教育授業があり、日本対がん協会はがん経験者の職員を外部講師として派遣して協力した。がんの基礎知識、がん予防や検診について説明し、体験談を通して健康や命の大切さを考え、周囲の支えへの感謝の気持ちなどを伝えた。

都立つばさ総合高校

2年生約220人を対象に保健体育の一環で23日に授業があった。周囲の当事者にどう接し、自身ががんになったらどう受け止めるかを考え、2人に1人ががんになる時代の生き方を見つめ直すことが目的。がん患者・家族を支え、地域全体でがんと向き合い、がん克服をめざすチャリティ活動「リレー・フォー・ライフ」(RFL)を担当する阿蘇敏之職員(54)が講師を務めた。

20歳の時、結婚直前に精巣がんと診断されたが、症例が少ない希少がんで周囲に相談できず不安だったと振り返りながら手術、放射線、抗がん剤などによる治療法、患者と医師が話し合

って治療法を決めるインフォームド・コンセントなどについて説明した。

43歳のとき、再発後の抗がん剤治療では副作用の吐き気や倦怠感などから心に余裕がなく、家族らにつらく当たってしまったという。しかし、家族や医療スタッフは笑顔で支えてくれ、その後は子どもの卒業式、家族旅行などの目標を立てながら治療を続けた。自身の経験を踏まえて「『がん』イコール『死』ではなく、がんと向き合って生きていくこともできる」「支え合うことが大切。がんになっても一人じゃない。声に出して誰かを頼っていい。



クイズを交え、がんについて話す阿蘇職員

話を聞いて思ったこと、感じたことを家で話してほしい」と話した。

また、授業前に寄せられた質問の中から、身近な人ががんになったらどう声をかけるのかについて「相手の人柄にもよるが、まずは話を聴いて寄り添うことが大事」とアドバイスした。

都立千歳丘高校

保健講話が3月24日にあり、2年生約200人が参加した。保健の授業で学んだことを基礎にして、健康と命の大切さについてより考えを深めることが目的。がん患者・家族支援に取り組む「がんサバイバー・クラブ」スタッフの堀均さん(74)が講師を務めた。

堀さんは2000年5月、48歳の時に肺がんが見つかり、転移再発を含めて手術を2回受けた。治療中は手術後の痛みに加え、家族の心労や長期療養で勤務先に迷惑をかけたことから心痛もあった。その後、「生かされた命で恩返しを」と考えて2006年からボランティアや協会職員としてRFLに取り組

み、世界中で活動する人たちの中から米国対がん協会が認定するグローバル・ヒーローズ・オブ・ホープ(希望のヒーロー)に選ばれた。2024年10月に食道がんが見つかり、現在、抗がん剤治療を続けている。

堀さんは、禁煙や生活習慣の見直し、ワクチン接種などでがんのリスクを抑えられること、早期がんは治る可能性が高いが、自覚症状が出ないため、がん検診を定期的に受けることが大切だと強調。内閣府のアンケートから「時間がない」「がんと分かるのが怖い」など検診を受けない理由を紹介し、家族に受診を勧めるよう

呼びかけた。また、「自分の命を大切にし、大切な人ががんになったら優しく寄り添ってください」と語りかけた。

最後に生徒代表が「健康の大切さを実感した。これからの人生のため、いまを大事にします」とお礼の言葉を述べた。



がん体験を語る堀さん

古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

詳しくは「チャリボン」 <https://www.charibon.jp/partner/jcs/> (ISBNのバーコードがついた書籍類が対象です)

charibon by VALLE BOOKS

お問合せ(株式会社バリュブックス): 0120-826-295
受付時間: 10:00-21:00(月~土) 10:00-17:00(日)

国・地域でのがん対策推進、がん患者支援などに尽くした個人・団体を顕彰

2026年度

6月30日締め切り

「日本対がん協会賞」「朝日がん大賞」候補者募集

日本対がん協会は4月から、2026年度の「日本対がん協会賞」「朝日がん大賞」の各候補推薦(個人・団体)の受け付けを開始した。有識者による選考委員会と日本対がん協会が受賞者を選出・決定し、「がん征圧月間」の9月、秋田市で開催する「がん征圧全国大会秋田大会」で表彰式を行う。応募締め切りは6月30日(必着厳守)。

日本対がん協会賞は、協会設立10周年を迎えた1968(昭和43)年度に創設された。がん検診の指導やシステム開発、第一線で検診・診断活動、がん予防知識の普及・啓発などで長年にわたり地道な努力を重ねた個人と団体が対象で、それぞれ数件を選出する。

朝日がん大賞は、日本対がん協会賞

の特別賞として2001(平成13)年度に朝日新聞社の協力を得て創設された。「がん予防」を中心に、がん医療・がん研究、画期的な医療機器の開発、がん患者・サバイバーの支援など幅広い分野が対象になる。活動期間は問わず、第一線で活躍している個人または団体の中から1件を選出する。

審査結果はがん征圧月間が始まる9月1日付で日本対がん協会のホームページなどで発表する。日本対がん協会賞の受賞者は正賞(レリーフ)と副賞(記念品)、朝日がん大賞の受賞者には

正賞(レリーフ)と副賞(100万円)が贈られる。

候補推薦では、所定の推薦用紙に必要事項を記入し、下記へ郵送する。資料がある場合は同封し、論文は代表的なもの(主著論文)5本までとする。

詳細は、日本対がん協会サイト(https://www.jcancer.jp/)の「お知らせ」(募集要項)で。推薦用紙や推薦基準などをダウンロードできる。問い合わせは、日本対がん協会内の事務局(電話:03-3541-4771<代表>、メール:jcskouhou@jcancer.jp)へ。

〒104-0045 東京都中央区築地5-3-3 築地浜離宮ビル7階
公益財団法人 日本対がん協会「日本対がん協会賞」係宛
締め切り:6月30日(火) 必着厳守

2026年度版リーフレット

「がん検診」「女性のがん」完成

日本対がん協会

日本対がん協会の啓発リーフレット「がん検診 5つのがん検診と健康習慣」「女性のがん 乳がんと子宮頸がん」の2026年度版が完成した。

「がん検診」は、国民のがん死亡率を低減させるとの科学的根拠に基づき、国が推奨している五つのがん検診(肺、胃、大腸、女性乳房、子宮頸部)の検査内容、がん検診を受けるうえでのメリットとデメリット、がんになるリスクを抑える「5+1」の健康習慣などについてまとめ、イラストを交えて説明

している。「女性のがん」は、20代後半~50代前半では女性のがん罹患率が男性を上回っていることから、「乳がん」「子宮頸がん」に関する基本的な情報をイラストとともに紹介。乳がん対策として国や専門医が推奨しているブレスト・アウェアネス(乳房を意識する生活習慣)についてまとめた「ブレスト・アウェアネス 4つのポイント」も掲載している。子宮頸がん対策では、主な原因となるヒトパピローマウイルス(HPV)の

感染防止に有効なワクチンの定期接種と海外の研究報告を紹介。子宮頸がん検診の検査内容もイラストを交えて説明している。

どちらのリーフレットにも2026年度がん征圧スローガン「がん検診 定期受診は 自己投資」が入る。A4判、両面カラーで三つ折りにしても扱いやすい構成になっている。

問い合わせは、日本対がん協会広報担当(電話:03-3541-4771<代表>、メール:jcsorder@jcancer.jp)へ。



がん検診 ~5つのがん検診と健康習慣~

女性のがん ~乳がんと子宮頸がん~